

シノドスへの歩み みことばと共に 復活節第六主日C年

小西広志

2022年5月22日

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は2022年5月22日、復活節第6主日となっています。今日の三つの朗読の箇所をシノドスの教会の観点から読んで味わってみましょう。

エルサレム使徒会議

今日の第一朗読の箇所は、西暦48年頃におこなわれた「エルサレム使徒会議」の結果の場面です。この会議はエルサレムからアンティオキアの教会にくだってきた人が異邦人キリスト者に割礼を要求したことに端を発します。アンティオキアの教会はユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者から成り立つ共同体でした。ユダヤ人にとって大切な割礼を、非ユダヤ人から改宗したキリスト者にもすべきだと主張がなされ、そこから2節にあるように「激しい意見の対立と論争」が生じました。

1節にある「割礼」について考えてみましょう。主イエス・キリストによってもたらされた救いはイスラエルに約束された救いの成就なのだから、異邦人のままで救いに与えることはできない。だから、まず割礼を受けてイスラエルの民のメンバーになることが必要だと考える立場がありました。これに対してパウロは割礼を受けたことで自動的に救いに与えるのではない。主イエス・キリストを信じる信仰が救いをもたらすのだ考えました。ですから、実際の割礼ではなく、心の割礼によって、キリストを通じて新たに生まれることが求められるのです（1コリ2章11-22節参照）。

聖なる都エルサレム

今日の第二朗読で「霊に満たされた」ヨハネは高い山で、聖なる都エルサレムが天からくだってくるのを見ます。ヨハネが見たのは世界の最終的な姿です。朗読の前半では新しいエルサレムの外観の特徴が述べられ、後半ではこの都に神殿がないことが指摘されます。

10節の「見せた」という小さなことばに注目してください。聖なる都エルサレムとは救いが完成した世界を意味します。それは天使によって見せられる、示されるもので、人間の努力で見えるものではありません。人

は聖なる都エルサレムの輝きに圧倒されるのです。

また、22 節の「神殿」にも注目してください。聖なる都エルサレムには「神殿」はありませんでした。「全能者である神」と、「小羊」であるキリストが都の中心、都の神殿だからです。「霊」に満たされたヨハネが、神と主キリストがおられるのに目の前で見たのですから、もはや神がおられることの「しるし」である神殿は必要ないのです。「しるし」を通じてではなく、主キリストと直接に交わることができるのです。

さらに、同じ節の「見なかった。必要でない」(22 節)も印象的な表現です。神の栄光を具現した新しいエルサレムについて語ることは、神そのものについて語ることと同じです。人間の限りある知識と理解では神について十全に語ることはできません。そこで「……ない」という否定形を用いてしか語られませんか。そこに存在しないものを挙げることで、新しい都、聖なる都エルサレムの完成がここでは示されているのです。

パラクレートス

福音朗読は先週に引き続きイエスの告別説教の一部です。別離を予告し、新しい掟を与えたイエスさまは(13 章 31-35 節)、ペトロの裏切りを予告しますが(36-38 節)、弟子たちには「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい」と励まします。そして今日の朗読箇所ではイエスさまは別れについて語ります。弟子たちに自分の死の意味を説き明かし、弁護者である聖霊を約束します。

25-29 節にある「弁護者」はギリシア語原文ではパラクレートスです。「わきに」を表すパラと「呼ぶ」を意味するカレオーによる合成動詞とパラカレオー(呼び寄せる、励ます)から派生した名詞です。「誰かを救助するために呼び出された者」が原義になります。告別説教では 4 回、そして『ヨハネの手紙』で 1 回用いられています。

26 節にあるように弁護者である聖霊は「わたしが話したことをことごとく思い起こさせ」ますが、それは弟子たちが忘れていたイエスさまのことばを思い出させるという意味ばかりではなく、イエスさまのことばと行いに含まれている深い意味、真意を悟らせるという意味でもあります。

31 節と 32 節にある「栄光を受けた」、「栄光をお与えになる」はどちらもギリシア語ではドクサゾーと言うそうです。栄光を表すドクサの動詞形です。ドクサには輝きという意味がもともとあります。その動詞形です。第一の意味として「人々がある人に抱く味方に影響を与え、その人の評判を高める」、すなわち「ほめたえる」があります(例: マタ 5 章 16 節参照)。次に「光彩を放つ、偉大さをもたせる、輝きを着せる」の意味もあるそうです。イエスさまは神によって「輝きを着せられ」、神さまはイエスによって「輝きを着せられ」るのです。つまり、子であるイエスさまと父である神さまの間には「栄光」が行き交うのです。イエスさまは父の栄光のために地上で行動し、父はイエスさまから栄光を受けるのです。

まとめ

三つの朗読に共通のテーマは「霊」となります。激しい議論が繰り広げられたエルサレム使徒会議は、「聖霊」に導かれて結論を下しました。「霊」に満たされたヨハネは幻(ヴィジョン)の中に天上の様子とこれか

ら起こる出来事を天使によって見せてもらいます。「弁護者」は聖霊のことです。「弁護者」(パラクレートス)は外からの迫害に対してはどのように信仰を証しするかを教えてくれる「弁護者」ですが、内側に生じる対立や不理解のためには「助け手」として働きます。様々な現実直面するわたしたちは、問題解決のために糸口、方法は持ち合わせていませんが、取りなしてくださる「弁護者・助け手」である聖霊の働きによって導かれ、生かされていきます。

それではまた来週